

令和2年 1月 10日
学校教育課

- 1 実施日 令和元年 10月 23日（水）
- 2 実施対象 府内中学校及び義務教育学校（96校）特別支援学校（4校）
- 3 実施教科及び受検者数 国語 9,270人 数学 9,268人 英語 9,275人
- 4 問題内容及び問題数
 - (1) 基礎・基本に関する問題 …… 20問
 - (2) 活用に関する問題 …… 5問
 - (3) 質問紙調査 …… 51問（学校独自に設定できる質問2問を含む）

令和元年度京都府学力診断テスト（中学2年生）を実施しました。学力調査と質問紙調査の結果について概要を報告します。

学力調査の状況

- 学力については、国語は定着しており、数学もほぼ定着しているが、英語については一部の領域に課題が見られる。
 - ・国語 ◆「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域は、定着している。
 - ◆「読むこと」の領域は、ほぼ定着している。
 - ・数学 ◆「数と式」の領域は定着しており、「関数」、「資料の活用」の領域は、ほぼ定着している。
 - ◆「図形」の領域に課題がある。
 - ・英語 ◆「聞くこと」、「読むこと」の領域は、ほぼ定着している。
 - ◆「書くこと」の領域に課題がある。

質問紙調査の状況

- 授業については、引き続き「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた改善に取り組んでいる。
 - ・「授業では、自分の考えを発表する機会が与えられている」（番号1）で、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した生徒の割合は92.8%（昨年度から0.4ポイント減少）であり、肯定的な回答している。
 - ・「授業では、みんなで話し合う活動をよく行っている」等（番号2～5）で、「当てはまる」と回答した生徒の割合は、H30中2で回答した生徒の割合と比べて0.6ポイントから3.6ポイントの増加が見られる。
- 授業の中での学習が、普段の生活の中で活用され、社会に出たときに役にも立つと思うなど、日常生活とのつながりを意識する生徒が増えている。
 - ・各教科での「将来、社会に出たときに役に立つと思う」（番号7、10、13）において、「当てはまる」と回答した生徒の割合が、国語は昨年度よりも1.2ポイント増加、数学は2.0ポイント増加、英語はH30中2から4.5ポイント増加した。しかし、中1時点での調査結果と比較すると国語も数学も大きな減少が見られ、今後も改善が必要である。

■ **家庭での学習習慣の定着については、横ばいである。**

- 平日の家庭での学習時間（番号 20）については、「2時間以上」の生徒の割合が昨年度よりも 0.7 ポイント減少、「30分未満」の生徒の割合は 0.6 ポイント増加であった。
- 「家で学校の宿題をしている」（番号 15）の質問に対して「している」「どちらかといえばしている」と回答した生徒の割合は 79.4%で、昨年度より 0.9 ポイント増加、「自分で計画を立てて勉強をしている」（番号 16）の質問に、「している」「どちらかといえばしている」と回答した生徒の割合は 53.6%で、昨年度より 0.4 ポイント増加、とほぼ横ばいである。

■ **規範意識については、横ばいである。**

- 「学校や社会のきまりや規則を守っている」（番号 42）の質問に、「当てはまる」と回答した生徒の割合は 58.0%（昨年度より 0.1 ポイント増加）とほぼ横ばいである。

■ **達成感を感じるが増加し、自己肯定感、自己有用感にも高まりが徐々に見られる。**

- 「学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがありますか」（番号 33）について、「当てはまる」と回答した生徒の割合は 55.0%（昨年度より 1.4 ポイント増加）、また、「物事を最後までやり遂げて、うれしかったことがある。」（番号 36）について、「当てはまる」と回答した生徒の割合は 75.7%（昨年度より 2.3 ポイント増加）であった。
- 「自分には、よいところがあると思う」（番号 47）の質問に、「当てはまる」と回答した生徒の割合は 27.1%（昨年度より 1.5 ポイント増加）であった。
- 「人の役に立つ人間になりたいと思う」（番号 40）では、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した生徒の割合は 93.2%（昨年度より 1.6 ポイント増加）、「自分には良いところがある」（番号 47）で「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した生徒の割合は 67.7%（昨年度より 3.3 ポイント増加）であった。

■ **携帯電話やスマートフォンの所持率が年々増加し、同時に通話やメール、ゲーム等を長時間する生徒も増加傾向にある。**

- 自分だけの携帯電話やスマートフォンを持っている生徒の割合（番号 30）は、80.0%となり、昨年度の 77.3%より 2.7 ポイント、29年度の 62.6%より 17.4 ポイント増え、年々増加し続けている。
- テレビゲームやスマートフォンを利用した通話やメール、インターネット等を利用する時間（番号 28・29）は増加傾向にある。

改善プラン ～指導を強化する事項～

各教科の魅力伝え、学びに向かう力を喚起しながら、思考できる教育活動を展開することで質の高い学力をはぐくむ

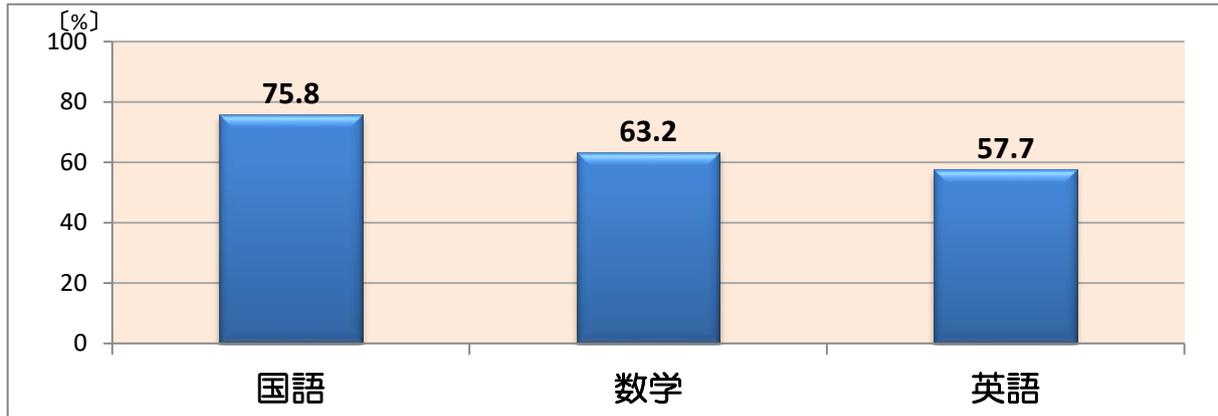
－認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ教育の推進－

- **あらゆる教科で言語活動を取り入れ、「ことばの力」に注視した授業改善を進める。**
 - ・授業に言語活動を取り入れていることと、教科の平均正答率とは相関関係が見られる。思考力・判断力・表現力等を育成するためには言語活動が不可欠であり、各教科で積極的に言語活動を取り入れた授業改善を進めていく。
 - ・ただ単純に対話するグループ活動だけを行うのではなく、ねらいを明確にして効果的な言語活動を行うことが必要であり、授業の中で思考力・判断力・表現力等を使い、課題の発見、解決に向けた主体的・対話的で深い学びを実現するような工夫を進めていく。
- **学習が日常生活や、将来社会の役に立つと思えるような資質・能力の育成を図る。**
 - ・実施が定着してきた授業の「めあて」と「振り返り」の研究をさらに深めつつ、より効果的に「学びに向かう力」をはぐくまれ、各教科の勉強が好きだという生徒が増えるような授業改善を進める。
 - ・その教科を学ぶ魅力が何であるのかについて今一度考えながら、「その教科の力が付いた」と実感できること、教科の学習が日常生活で役立つと明確に分かることを意識した授業改善を進める。
- **児童生徒の学力向上を小中連携の視点で捉え、9年間を見通した指導を行う。**
 - ・小、中学校で各教科の課題を共有し、学びの連続性を意識した取組を行う。
 - ・京都府学力診断テスト(小4・中1・中2)及び全国学力・学習状況調査(小6・中3)の結果から、児童生徒の学力実態や家庭における生活状況等の特徴や課題を把握し、それらを次の取組に活かせるように意識した取組を考える。
- **生活習慣の確立、家庭学習の一層の定着を図る。**
 - ・生徒指導の機能(自己決定の場・自己の存在感・共感的な人間関係)を活かして、生徒への適切な声かけを行い、より良い学級環境づくりを目指した学級経営を行う。
 - ・今後も基本的な生活習慣の確立や学習習慣を身に付ける取組を家庭(保護者)と連携して、さらに充実させていく。スマートフォンや携帯電話に潜む危険性や家庭でのルール・使い方等について保護者への啓発をさらに進める。
- **褒める、評価するなどの取組を振り返り、自尊感情を高め、規範意識や豊かな人間性をはぐくむ指導の充実を図る。**
 - ・授業を始め学校生活全体を通して努力の事実を評価し、周囲からの温かい愛情や信頼、期待を感じさせることにより、「包み込まれているという感覚」をはぐくみ、生徒の自己肯定感や自己有用感を高める。
 - ・各学校で育成を目指す生徒像を明確にして、組織的に自校の生徒を育てる体制の確立を目指す。

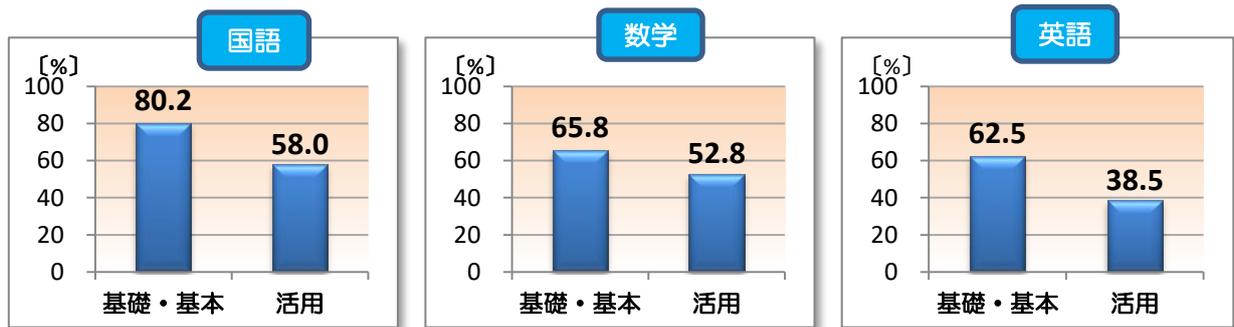
5 結果の状況（京都府全体）

(1) 教科別

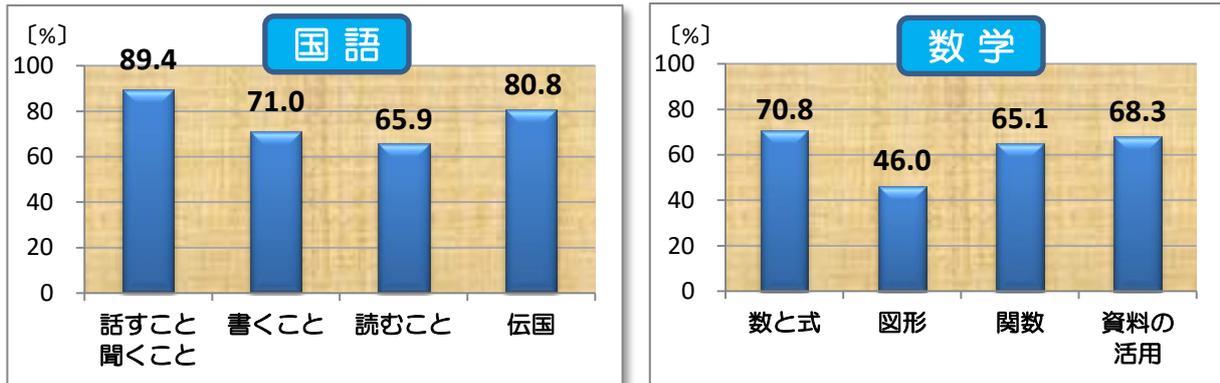
※数値はすべて正答率（100%）



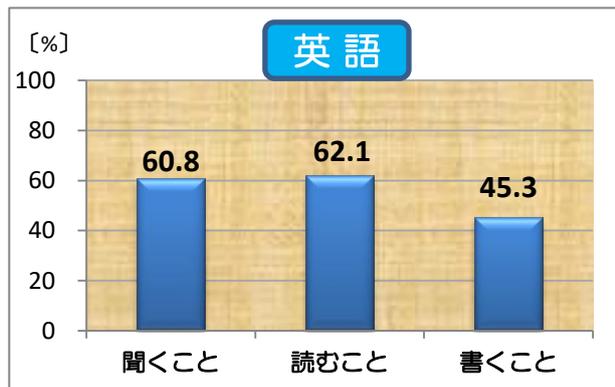
(2) 問題類型別（基礎・基本に関する問題 活用に関する問題）



(3) 領域別



*伝国…伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項



(4) 教育局別平均正答率

乙訓
(8校)

国語 (1,266 人 13.7%)
 数学 (1,268 人 13.7%)
 英語 (1,268 人 13.7%)



山城
(35校)

国語 (4,453 人 48.0%)
 数学 (4,454 人 48.1%)
 英語 (4,459 人 48.1%)



南丹
(15校)

国語 (1,024 人 11.0%)
 数学 (1,022 人 11.0%)
 英語 (1,023 人 11.0%)



中丹
(22校)

国語 (1,574 人 17.0%)
 数学 (1,573 人 17.0%)
 英語 (1,574 人 17.0%)



丹後
(12校)

国語 (751 人 8.1%)
 数学 (750 人 8.1%)
 英語 (750 人 8.1%)



() は、
 (受検者数 府全体の受検者数に占める割合) を表
 ず。